

八戸市

シニア災害ボランティアセミナー開催報告

平成26年度 八戸市

安全・安心まちづくり推進協議会

シニア災害ボランティアシンポジウム

平成27年2月13日（金）、八戸市公会堂文化ホールにおいて、シニア世代のボランティア参加について考えることを目的に、八戸市、八戸警察署の主催、当協会の共催、八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部の協力により「平成26年度八戸市安全・安心まちづくり推進協議会」が開催されました（参加者数139名）。

冒頭に、八戸市長小林眞氏より開会のご挨拶と同市の防災への取り組み状況の報告があり、八戸警察署より平成26年の管内の治安情勢についての報告がありました。

引き続き栗田暢之氏（特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事）の講演が行われました。

基調講演

14:25～15:25

災害から学んだこと
～阪神・淡路大震災から20年を
迎えて～

特定非営利活動法人

レスキューストックヤード代表理事

栗田 暢之氏

私たちのボランティア活動の原点となりました阪神・淡路大震災から20年を迎えるにあ

たつて、このときに何があったのかを皆さんと一緒に考えながら、普段から防災・減災まちづくりを生かしていかなければならないことをお話しさせていただきます。

人間は長生きできてもせいぜい百年ですが、活断層は一千年に1回とか、一万年に1回しか動きません。人間には計り知れない事が起こりうるのだということを、頭の片隅に置きながら生活していただきたいと思います。日本は地震大国だという認識をつねにしておくことが、私たちの務めではないかと思っています。

● 阪神・淡路大震災から20年

平成7年1月17日 午前5時46分、ほとんどの方が寝静まっていた時間……あれから20年。

私どもは、毎年1月17日は神戸の現場に行きまして、いろいろな追悼行事に参加していますが、今年は20年ということもあり、マスコミの方も多数参加されていました。

20年という長い時間が経つても、やはり被災者の皆さんは泣いていらつしやいました。何年経とうと、失ったものが大きければ大きいほど、その悲しみが消えることはないのです。こういう思いを、私たちは減災・防災につなげていかなければと非常に感じます。20年経

つて、阪神・淡路大震災の経験を防災・減災でちゃんと生かしているかというと、なかなか伝え切れていない状況があります。

● 倒壊・転倒への安全対策は

阪神・淡路大震災で亡くなった方の死因の8割以上が、家屋の倒壊や家具の転倒等による圧死・窒息死だったとのことです。家屋に押しつぶされ、家具に挟まれて、そこに火が来て……倒壊や転倒がなければ、こういう状況にはならなかったということが言えると思います。

地震大国の日本において、私たちはこの事実をもう少し真摯にとらえて、そもそも地震に負けない耐震性の高い家に住む、あるいは不用意に家具を置かない、せめて寝ている前には置かないという対策を、国民全員がやれば、このような悲劇はもつと少なくなっていくのではないかと考えます。

災害に備えて、水や食料の準備はもちろん必要ですが、その前に、私たちの暮らしぶり、暮らし方、安全対策をハード面から支える取り組みが必要だということです。

● 災害から子どもたちを守る

どこの災害においても、一番悲しいのは、子どもを亡くした親にあうことです。憔悴しきつていて声もかけられません。私たちボランティアに「明日から私たちは何を頼りに生きていけばいいのですか……」と聞かれるのです。

答えが見つかりません。こんな悲しい話が被災地には尽きないのです。

大人が子どものために出来ることは全部やろう。小学校の入口に優勝トロフィーなどが



栗田 暢之

特定非営利活動法人レスキューストックヤード
代表理事

阪神・淡路大震災の際、当時勤務していた大学の学生ら延べ1,500名のコーディネートを務め、以降現在までに35カ所を超える自然災害の現場で支援活動を展開している。また、その現場での学びを生かし、地域防災力の向上や災害ボランティアの育成等に尽力している。東日本大震災支援全国ネットワークの代表世話人、愛知県被災者支援センター長なども務める。



入ったガラスケースが置いてあります。あれはちゃんと止めてあります。教室には天井からテレビが吊ってあります。大きな地震が来ても大丈夫ですか？ 子どもの命を守るために私たちに出来ることはたくさんあります。

小学校では、大人がする地震対策を子どもたちに見せる。そして、子どもたちがそれを家族に伝える。こういう循環をしっかりと確立させていかないといけないのではないのでしょうか。

● 地域防災は地域の助け合いから

阪神・淡路大震災で約3万5千人の方が家屋の倒壊などで生き埋めになりました。そのうち2万7千人は地域住民が助け出しましたが、その後、自衛隊・消防隊が到着したときには、残りの方の約半数が既に亡くなられていました。

日本の救急体制は世界最高水準で、119番通報してから現場到着まで全国平均で約8分です。多くの方々の努力に支えられ、私たちの暮らしは守られています。

しかし、大災害となると話は別です。すべての出動要請に応えることは不可能です。また、阪神・淡路大震災では、出動しても道ががれきで塞がっていて前に進めない、水が断水していて放水できない等々。様々な要因で救出活動が阻害されてしまいました。これが大災害です。

亡くなられた方の死亡推定時刻は9割以上の方が地震発生から15分以内だそうです。この時間に助け出せるのは、地域の皆さんだけです。阪神・淡路大震災で、「命を守る3点セッ

ト」はボール、のこぎり、ジャッキでした。また、各家庭にスコップがあれば、もっと多くの方を救えたかもしれません……。

自宅から消火器やボール、ジャッキ、スコップなどを持ち寄って、防災訓練を実施してみろ。このような参加型の防災訓練に変えていかなくてはならないと思います。

地域社会がしっかりとすればするほど、災害時に助かる人は多くなります。

● 災害関連死を減らす

阪神・淡路大震災では、914名の方が震災後に震災関連で亡くなりました。このうち90%以上が60歳以上のお年寄りです。避難所暮らしによる持病の悪化、ストレスからくる体調不良等が原因です。

避難所の管理者は行政ですが、運営は地域です。地域の皆さんが創意工夫をして、少しでも快適な空間をつくらうということが、地域社会のなかで出来るかどうかということです。

「避難所の運営は地域力に勝るものなし」とは東日本大震災でも言われたことです。

● 水害への備え

水害については命を守るためにどうしたらよいか、どうやって避難行動をするかが大事です。

災害の状況は様々ですが、まずは自分の住む地域の高低差や昔どのような土地であったかの由縁を知ること。

そして、豪雨に関するさまざまな情報を聞き分ける。一番大事なのが避難情報です。行政機関が発令する避難指示・避難勧告・避

難準備情報を頼りに適切な行動をとるということです。

● 防災訓練は楽しく

防災・減災はすべて平時のあり方です。防災訓練の参加率が低い場合には、時には楽しくやりましょう。

消火器の使い方を覚えてもらうために、親子参加で水消化器を使ってカエルの的に水を当てるゲームをしたり、いざというときに大声が出せるよう、お年寄りや子どもたちに大声で「火事だ」と叫んでもらって騒音測定器で声の大きさを競ったり、バケツリレーを地区対抗でやったり、楽しい企画で、防災訓練の参加者を増やしましょう。

● この社会はお節介が必要

災害救援の柱は行政です。ものすごく頑張つてやっていただけます。しかし、行政だけでは限界があるということも私たちは大災害から学びました。やはり住民参加が必要です。

災害が起こる前にきちんと備えていたから、みんなが助かった、こういうことで喜び合える社会を早く実現しないといけないと思います。

今後も親から子へ、子から孫へと伝承を続けていただきたいということをお願いしまして、私の講演とさせていただきます。ご静聴有り難うございました。

以上が講演の概要です。

参加された皆さんは、震災での経験を生かして、さらなる防災・減災に取り組もうと、思いを強くされたことと思います。